



 Data	2023-101
監督・脚本・原案・製作：ウェス・アンダーソン	
出演：ジェイソン・シュワルツマン ／スカーレット・ヨハンソン ／トム・ハンクス／ジェフリー・ライト／ティルダ・スウィントン／ブライアン・クラ ンストン／エドワード・ノー トン／エイドリアン・プロデ イ／リーヴ・シュレイパー／ ホープ・デイヴィス／ステイ ーヴン・パーク	

みどころ

アステロイド＝小惑星だから、アステロイド・シティは小惑星の街。アメリカ南西部にある人口 87 人のこの街は隕石で有名だが、ネバダの核実験場がすぐ近くにあるから、時折、核爆発のドカーンというものすごい音が。こりやたまらん！ウェス・アンダーソン監督が紡ぐ、「砂漠の街アステロイド・シティとその舞台裏で繰り広げられる、不可思議でちょっと切ない物語。」とは一体ナニ？

本作の主役は、一方では劇作家と舞台演出家だが、他方では、アステロイド・シティで開催される「ジュニア宇宙科学賞」の受賞式に出席する 5 人の天才児とその家族たちだ。それだけでも結構面白いのに、受賞式の真っ最中に宇宙人が登場し、隕石を盗んでいくから（？）、アレレ、アレレ・・・。

2020 年 1 月から 3 年余続いたコロナ禍によって、全世界は“都市封鎖”という壮絶な体験を余儀なくされたが、宇宙人出現の事実を隠蔽しようとするアメリカ政府と軍は、アステロイド・シティの“都市封鎖”を決行したから、さあ大変だ。そこから始まる、“不可思議でちょっと切ない物語”をしっかりと楽しもう。

■□■この監督作品は必見！毎回驚きと発見が！■□■

1969 年生まれだから、未だ巨匠とは言えないが、ウェス・アンダーソン監督は『グランド・ブタペスト・ホテル』（14 年）（『シネマ 33』17 頁）でアカデミー賞 4 部門、ゴールデングローブ賞を受賞した。もっとも、タランティーノ監督は 1963 年生まれだが、既に巨匠と言われている。タランティーノも個性的で面白いが、ウェス・アンダーソン監督もそれは同じだ。しかし、『アステロイド・シティ』って一体何？

タイトルだけでは何のことかさっぱりわからないが、本作のチラシやパンフによると、「ようこそ、夢と愛と驚きが詰まった 1950 年代のアメリカへ!」「砂漠の街アステロイド・シティとその舞台裏で繰り広げられる、不可思議でちょっと切ない物語。」らしい。なるほど、なるほど。そう聞けば、こりゃ必見!

■時代は 1955 年。舞台はアステロイド・シティ!■

本作の時代は 1955 年。その時代の日本は、1945 年の敗戦で焼け野原となった国土の中で懸命に戦後復興を進め、朝鮮特需 (1950~52 年) のおかげと、吉田茂をはじめとする“政治の力”で実現させた、1951 年のサンフランシスコ講和条約締結 (単独講和) によって“独立”を果たし、日米安保条約の下で本格的復興と経済成長に向かおうとしていた時期だ。

それに対して、戦勝国アメリカの 1950 年代は、まさにアメリカンドリームの時代=古き良き時代だ。国際的には、同じ戦勝国であるソ連との間で「東西冷戦」状態となり、軍事拡張競争、核拡散競争、宇宙開発競争になっていたが、その状況下でも“アメリカ優位”はハッキリしていたから、アメリカ人は余裕しゃくしゃくだった。そんなアメリカだから、娯楽としての映画は「映画の都ハリウッド」を中心に発展し、マリリン・モンローが大人気となった。ちなみに、マリリン・モンローが 1960 年代に大統領に就任したジョン・F・ケネディ大統領と浮名を流したことは有名。誕生日パーティーの席で「ハッピーバースデー・ミスタープレジデント」と色気たっぷりに歌うマリリン・モンローの姿は今でも私の記憶にハッキリ残っている。

他方、本作のタイトルとされているアステロイド・シティは、アメリカ南西部に位置する砂漠の街。ちなみに、アステロイド=小惑星だから、アステロイド・シティは小惑星の街だが、その人口は何と 87 人というからビックリ! この街は紀元前 3007 年に隕石が落下してできた巨大なクレーターが最大の観光名所だが、それにしても人口 87 人とは、いやはや……。スクリーン上に映し出されるアステロイド・シティの姿はウェス・アンダーソン監督作品らしく、パステル色に満ち溢れた、魅力的な街だから、本作ではそれをしっかり味わいたい。

■ネバダの核実験や UFO 騒動は 50 年代の負の遺産?■

森の中に浮かび上がる“Hollywood”の文字は、1950 年代アメリカの豊かさの象徴。『バビロン』(22 年) (『シネマ 52』50 頁) は、その時代のハリウッドの姿をトコトン表現した面白い映画だった。しかし、1950 年代の東西冷戦をはじめとして、キューバ危機やベトナム侵攻はケネディ大統領時代の負の遺産だ。それと同じように、50 年代のアメリカの負の遺産が、ネバダの核実験と UFO 騒動……?

本作のパンフレットには山崎まどか氏 (コラムニスト) の column「ウェス・アンダーソンが隠し持つ反骨精神」がある。そこではネバダの核実験、UFO 騒動について解説されているので、これは必読。ちなみに、アステロイド・シティにはガソリンスタンドやレストランがあるから、車でこの街を訪れた人は、1 台しか入らないそのガソリンスタンドで給

油しつつ、レストランで休憩するのが通常だ。しかし、休憩のために入ったレストランで、いきなり“ドーン”という大爆発音を聞かされると、誰だってビックリするはずだ。この“ドーン”という音こそ、ネバダ名物(?)である核実験の音だが、爆発音の後、その方向を見ると、そこには巨大なきのこ雲が！こりゃ嘘だろう！誰でもそう思うはずだが、1950年代のネバダでは、こんな核実験が頻繁に繰り返されていたらしい。そう考えると、1950年代がアメリカンドリーム時代だった、ってホント？

■□■この演劇とこの劇作家を知ってる？しっかりお勉強を！■□■

私は1967年4月の大学入学後すぐに学生運動に飛び込み、大学構内でのアジ演説とビラ書きを始めたが、下宿では“ある人々”の影響を受けて、突然“文学青年”となり、さまざまな小説を読みふけた。その1つがアメリカのテネシー・ウィリアムズの演劇で、彼の代表作が戯曲『欲望という名の電車』(47年)だ。

本作は冒頭、司会者(ブライアン・克蘭ストン)がTV番組で、劇作家のコンラッド・アープ(エドワード・ノートン)による新作劇『アステロイド・シティ』の創作過程を紹介するところから始まる。小説でも脚本でも舞台劇でも、書く(タイプを打つ)という作業は孤独なものだから、スクリーン上では舞台劇『アステロイド・シティ』を生み出していく上でのアープの悪戦苦闘ぶりが描かれる。もっとも、劇作家だけでは舞台劇は成功せず、そこでは舞台演出家が必要だ。そこで、アープが見出した若き才能の舞台演出家がシェーベルト・グリーン(エイドリアン・プロディ)だが、スクリーン上ではアープがグリーンの才能をはっきり認識した後、グリーンがズボンを脱いで抱き合う姿が！こりゃ一体ナニ？

私はその意味がサッパリわからなかったが、パンフを購入し、前述の「ウェス・アンダーソンが隠し持つ反骨精神」の他、町山智浩氏(映画評論家)のReview「パステル色の絆創膏」を熟読したことによって、ハッキリ理解することができた。それはつまり、アープのモデルであるテネシー・ウィリアムズとグリーンモデルであるエリア・カザンはゲイの関係だったということだ。

パンフを読んでさらに詳しく(正確に)確認できた(わかった)ことは、第1に、コンラッド・アープはウィリアム・インジ、アーサー・ミラー、テネシー・ウィリアムズ、エリア・カザンを融合させた人物であることだ。そして、第2に、アープとグリーンがトリオを結成した男がソルツバーク・カイトル(ウィレム・デフォー)だが、彼のモデルはニューヨークの俳優養成所アクターズ・スタジオでキャラクターを内面化する演技法「メソッド」を教えたリー・ストラスバークであり、リー・ストラスバークの生徒が、マーロン・ブランド、ポール・ニューマン、そしてマリリン・モンローだったということだ。そこでは、「マリリン・モンローは自分の内面を見つめすぎて精神を壊したと言われる。」と解説されている。本作を正確に理解するためには、これらをしっかりお勉強することが不可欠だ。

■□■この街の姿と、そこに集まる天才たちに注目！■□■

本作の面白さを理解するためには、何よりもまず、砂漠の中にポツンとできた、人口 87 人というアステロイド・シティの姿を味わう必要がある。本作のストーリーは、落下してきた隕石によってできたという巨大なクレーターが唯一最大の観光名所であるアステロイド・シティに、ジュニア宇宙科学賞の荣誉に輝いた 5 人の天才的な子供たちとその家族が招待され、集まってくるところから始まる。その 1 人は 14 歳のウッドロウ（ジェイク・ライアン）。彼は戦場カメラマンの父オーギー（ジェイソン・シュワルツマン）とまだ幼い 3 人の妹と共にレッカー車に牽引された車で街に到着したが、車が故障したオーギーがウッドロウたちの母の父、スタンリー（トム・ハンクス）に送迎を頼むべく電話している姿を見ると、いろいろと深刻な“家庭の事情”があるらしい。

天才は男の子だけに限らず、マリリン・モンローを彷彿させるグラマラスな映画スター、ミッジ（スカーレット・ヨハンソン）が、シングルマザーの役割を果たすべく付き添ってきた娘のダイナ（グレイス・エドワーズ）もその 1 人だ。もっとも、娘に対するミッジの面倒見は悪く、空いた時間は演技の練習に没頭していたからアレレ・・・。

本作導入部は、アステロイド・シティに到着した 5 人の天才的な子供たちとその家族たちのキャラをウェス・アンダーソン監督流のやり方で紹介していくので、それをしっかり楽しみたい。

なお、本作はトム・ハンクス、スカーレット・ヨハンソン、ジェイソン・シュワルツマン他、豪華俳優陣が“売り”の 1 つ。そして、①トム・ハンクスがオーギーの義父、スタンリー・ザック役で、②マリリン・モンロー役でスカーレット・ヨハンソンが登場するので、その演技に注目！なお、③オーギーの妻／女優役でマーゴット・ロビーが登場するが、これは 1 シーンだけなのでお見逃しなきよう。

■□■受賞式では、あっと驚くハプニングが！■□■

本作に登場するウッドロウの妹である 3 人の幼い“お姫サマ”はメチャ可愛いが、ウッドロウをはじめとする 5 人の天才児たちは“少年らしさ”、“少女らしさ”が全くないのが特徴。それぞれの天才ぶりは、自分の得意分野、研究分野を語る姿を見れば明らかだが、その内容は私にはチンプンカンプンだ。したがって、彼らの研究内容や研究成果には全く興味を持ってないが、本作でビックリするのは、栄えある受賞式の真っ最中に、あっと驚く円盤（宇宙船）が近づいたかと思うと、その中からスルスルと 1 人の宇宙人（ジェフ・ゴールドブラム）が地上に降り立ち、アステロイド・シティ名物の隕石を円盤の中に持ち去り、すぐに消えてしまったことだ。

受賞式には多くの参加者が参列していたから、その全員がこの一部始終を目撃していたが、それをカメラに収めたのは戦場カメラマンで、常に肩からカメラをぶら下げているオーギーだけ。しかし、受賞式の出席者全員が宇宙人と宇宙船の目撃者だし、オーギーのカメラにはハッキリその姿が写っているのだから、このハプニング（歴史的快挙？）を伝え

るニュースは、いち早く世界中に広がっていくはず！私はそう思ったが、何とここで米国政府と軍は宇宙人出現の事実を隠蔽するべく街を封鎖してしまったからアレレ・・・。

ちなみに、2020年1月から3年余も続いたコロナ禍では、“都市封鎖”が現実のものになった。中国では大規模に実施された都市封鎖を巡ってあつと驚く大騒動が発生したが、宇宙人出現の噂を封じ込めるための“都市封鎖”など可能な？人口87名だけのアステロイド・シティの都市封鎖なら可能かもしれないが、折悪しく(?)、今回はジュニア宇宙科学賞の受賞式への出席者全員が目撃者だから、この全員の口を封じ込むことなど到底ムリなのでは・・・？

■劇中劇は面白い！俳優たちVS演出家の葛藤は？■

『恋に落ちたシェイクスピア』(98年)は「劇中劇は面白い！」ことを実証する最高傑作だったが、TV司会者による、新作舞台『アステロイド・シティ』の紹介から始まる本作も、「劇中劇は面白い！」を実証することができる映画だ。したがって、本作後半では、突然の宇宙人の出現によってアステロイド・シティ内に“都市封鎖”されてしまったオーギーたち家族や、5人の天才少年少女たちとその家族たちの“苦悩ぶり”を中心に、しっかりストーリー展開を楽しみたい。

それにしても、本作のスクリーン上に大写しされた、両目玉だけを異様に光らせた、異様に長身・細身の宇宙人の姿にはビックリさせられたが、ある日、その宇宙人があの円盤(宇宙船)に乗って再びアステロイド・シティに飛来し、今度は、あの隕石を地上に返していくから、それに注目！これは一体どういう意味なの？

劇作家のアーブと舞台演出家のグリーンはこんな演出にどのような意味を持たせているの？それは本作を見ている私の疑問であるのみならず、舞台劇『アステロイド・シティ』に出演する多くの俳優たちの疑問でもあったようだ。そのため芝居の意味がわからなくなった俳優たちは演出家のグリーンに詰め寄っていったが、さて・・・。

2023(令和5)年9月7日記